

北海道におけるキノコ栽培の現状

- 増加するキノコの生産量 -

伊藤 清

はじめに

北海道におけるキノコ類をはじめとする特用林産物は、近年、消費生活の高度化・多様化に伴って需要が堅調に推移し、生産も年々増加の傾向にあります。

なかでもキノコ類の生産は、農山村地域での農林家の複合経営により、所得の向上や就労機会の増大が期待される重要な産業の一つとして定着しつつあります。しかしながら、本道のキノコ産業は、まだその生産基盤が整備途上にあること、気象条件が厳しいことなどから先進他県に比べて種々の面で立ち後れています。そこで、生産量、生産者、および価格・流通などから現状を分析してみました。

生産量の推移

北海道で栽培されているキノコ類は、シイタケ、ナメコ、エノキタケ、ヒラタケ、タモギタケ、マイタケ、ブナシメジ、えぞ雪の下（野生型エノキタケ）などです。自然食品ブームや健康に配慮した食生活への志向から道内一世帯当たりのキノコの消費量は、表1に示すように、平成8年は約7kgで堅調な伸びを示しています。

道内のキノコ生産量・生産額の推移を表2に示します。8年における生産量は約1万5千t、生産額は99億円に達し、3年に比較すると生産量で145%、生産額で128%になっています。しかし、全国のキノコ生産に占める本道の生産量は、本道のキノコといえる、タモギタケ、えぞ雪の下を除けばわずか数%を占めているだけです。

品目別にみると、ブナシメジの伸びが著しく、3年の生産量207tから8年には3,427tと17倍になっています。また、エノキタケの生産も伸びており、3年の生産量2,884tから8年には4,249tと1.5倍になりました。さらに、栽培キノコとしては新しいマイタケ（写真1）の生産量も順調に伸びて、3年の399tから8年には664tと1.7倍になっています。一方、ヒラタケ

（写真2）の生産量は、3年の1,998tに対して8年には669tと約3分の1に減少しています。理由として

表1 北海道におけるキノコ消費量の推移（1世帯当たり）

区分	年次	H4 (g)	8 (g)	8/4 (%)
生シイタケ		1,911 g	1,953 g	102%
施設栽培型キノコ		4,383	4,732	108
計		6,294	6,685	106

施設栽培型キノコは、シイタケ以外のキノコを示す



写真1 生産量が増加するマイタケ

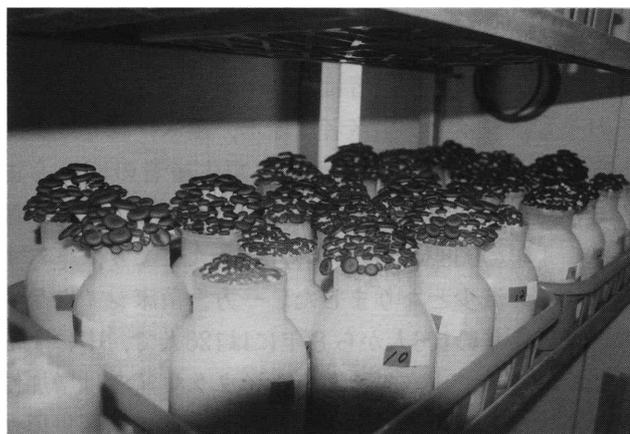


写真2 生産量が減少するヒラタケ
（美味なキノコとして一部では根強い人気がある）

表2 道内キノコ類の生産推移

生産年 品目	生産量 (t)							生産額 (百万円)						
	H3	4	5	6	7	8	8/3 (%)	H3	4	5	6	7	8	8/3 (%)
乾シイタケ	7	6	4	5	4	4	57.1	30	27	17	18	17	14	46.7
生シイタケ	3,065	3,426	3,828	3,754	3,952	4,124	134.6	3,280	3,563	4,058	3,829	3,715	4,041	123.2
原木栽培	2,680	2,503	2,408	2,129	2,079	1,695	63.2	2,868	2,603	2,554	2,168	1,954	1,661	57.9
菌床栽培	385	923	1,420	1,625	1,873	2,429	630.9	412	960	1,504	1,658	1,761	2,380	577.7
ナメコ	1,261	1,391	1,526	1,514	1,409	1,357	107.6	883	918	916	863	775	801	90.7
エノキタケ	2,884	3,436	3,514	3,577	3,849	4,249	147.3	1,529	1,512	1,757	1,788	1,617	1,572	102.8
ヒラタケ	1,998	1,702	1,410	1,044	877	669	33.5	1,219	936	860	606	438	375	30.8
タモギタケ	409	390	316	282	280	352	86.1	233	226	196	203	151	183	78.5
マイタケ	399	400	462	457	576	664	166.4	379	424	452	481	466	578	152.5
えぞ雪の下	37	33	8	4	1	1	2.7	25	17	5	2	1	1	4.0
ブナシメジ	207	294	361	481	1,378	3,427	1655.6	159	218	282	284	964	2,330	146.5
合計	10,267	11,078	11,429	11,118	12,326	14,847	144.6	7,737	7,841	8,543	8,074	8,144	9,895	127.9

は、大企業生産者が進出し、ヒラタケよりも日持ちがよく、価格が高いブナシメジの生産量が増加したためと考えられます。また、タモギタケの生産量は、種菌のトラブルによる発生不良、価格の低迷などが原因で3年の409tから8年には352tと14%減少しました。

ここ数年シイタケの生産にも大きな変化が生じてきました。すなわち、シイタケの原木であるミズナラの手入が困難になったのを機会に、生産期間の短縮、労働負担の軽減などメリットのある菌床栽培への移行が進展してきています。また、3年3月から北海道きのこ農業協同組合が菌床シイタケ工場の稼働を開始したのがきっかけとなって、各地でブランド化が進んでいます。図1に示すように、生シイタケの生産量に占める菌床シイタケのウエイトは、3年には生産量の3,065tに対して13%であったのが、8年には4,124tに対して59%を占めるまで急上昇しています。

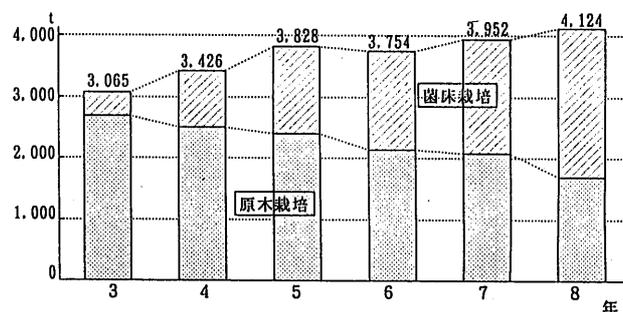


図1 生シイタケ生産量の推移 (原木・菌床)

表3 北海道におけるシイタケ生産者の推移

区分	年次	H4 (人)	8 (人)	8/4 (%)
菌床シイタケ生産者		106	126	119
原木シイタケ生産者		638	445	70
小計		744	571	77
乾シイタケ生産者		86	30	35
計		830	601	72

生産者の推移

本道のシイタケ生産者(施設)数を表3に示します。本道のキノコ類の生産者は、8年現在733人おります。そのうち、シイタケ生産者は原木、菌床、乾シイタケ生産者を合わせて601人でキノコ類生産者の82%を占めています。これを原木、菌床別にみると、原木生産者は、4年の638人から8年には445人となり、率にすると30%の減少となりました。一方、菌床シイタケ生産者は、4年の106人から8年には126人で、率にすると19%の増加です。年々菌床シイタケ生産者は増加傾向にあることがわかります。しかも、その生産規模が大型化、専門化に進みつつあります。

シイタケ以外の施設栽培型キノコ生産者数を表4に

表4 施設栽培型キノコの生産者の推移

区分	年次	H4 (人)	8 (人)	8/4 (%)
ナメコ		35	21	60
エノキタケ		47	27	57
ヒラタケ		48	26	54
タモギタケ		9	5	56
マイタケ		17	44	259
えぞ雪の下		2	2	100
ブナシメジ		7	7	100
合計		165	132	80

示します。マイタケが4年の17人から8年に44人となり約2.6倍になりました。一方、ナメコは4年の35人から8年に21人となり40%の減少、また、エノキタケ

も4年の47人から8年に27人となり46%減少しました。このように施設栽培型キノコ生産者については全般的には減少し、生産規模が大型化の傾向にあります。とくに、マイタケやブナシメジ等比較的栽培歴史の新しい作目（品種）のキノコ生産者が増加傾向にあり、生産形態は副業的キノコ生産から企業的キノコ生産へ移行しつつあります。

キノコ生産者を年齢別に見てみます（表5）。栽培歴史の古い原木シイタケが60代以上51%、ヒラタケは60代以上が54%、タモギタケは60代が100%を占めております。また、比較的栽培歴史が新しく、しかも、生産者が増加傾向にあるマイタケも60代以上が45%を占めています。ヒラタケは、今後、生産量、生産者ともに減少を続けると推察されます。また、生産者がわずかに5人だけのタモギタケは、60代が100%となっておりますが、企業的あるいは生産組合形態で栽培されており、このまま推移していくものと考えられます。

価格・流通面の推移

道内10市場におけるキノコ類の入荷量に対する道内産の占める割合は、8年には88%となっております。また、ブナシメジを除いた流通量では、道内産が92%を占めるまでに上昇しました（表6）。したがって、現状では飽和状態を迎えているといえます。このため、産地間競争が激しくなり、価格にも影響を及ぼしています。

道内のキノコの価格を表7に示します。施設栽培型のキノコの中では、マイタケの価格がシイタケについて高値で推移していますが、4年に比較して8年では15%もダウンしています。また、ブナシメジは日持ちの良さなどから、生産量を伸ばしていますが、大型栽培者の参入により供給過剰となって価格の落ち込みが激しく、4年に比較して8年では10%のダウンとなっております。さらに、エノキタケも同様に年々価格が下がっており、4年対比14%のダウンとなっております。さらに、ヒラタケについては、ブナシメジとの競合のなかで年々生産者の減少と共に生産量も減少し、市況も低迷しています。このように、キノコの価格は全般的に値下がりまたは横ばい傾向となっております。

販売体制の推移

一方、外食および調理食品産業のキノコ使用拡大など、需要は多様化してきており、スーパー等大型店で

表5 平成8年度現在キノコ生産者の年代別構成

単位：%

品目	年代	20・30	40	50	60	70・80
原木シイタケ		5	24	20	30	21
菌床シイタケ		9	19	34	28	10
ナメコ		0	22	33	34	11
エノキタケ		0	36	55	9	0
ヒラタケ		0	23	23	35	19
タモギタケ		0	0	0	100	0
マイタケ		6	22	27	22	23
えぞ雪の下		0	0	100	0	0
ブナシメジ		0	0	100	0	0

表6 道内主要10市場におけるキノコ類の入荷量と道内産割合の推移

単位：トン

品目	年	H 4	5	6	7	8
生シイタケ		3,567 (87)	3,595 (92)	3,582 (90)	3,794 (89)	3,679 (92)
ナメコ		1,359 (94)	1,535 (97)	1,410 (97)	1,338 (97)	1,259 (96)
エノキタケ		3,771 (89)	3,613 (93)	3,418 (92)	3,432 (92)	3,473 (96)
ヒラタケ		1,472 (99)	1,163 (99)	949 (97)	672 (95)	487 (95)
タモギタケ		165 (100)	146 (100)	120 (100)	130 (100)	126 (100)
マイタケ		360 (95)	446 (94)	477 (86)	622 (74)	610 (74)
ブナシメジ		966 (21)	1,387 (17)	1,570 (18)	2,119 (40)	2,348 (68)
計		11,660 (85)	11,885 (85)	11,526 (82)	12,107 (82)	11,982 (88)

注1 入荷量は主要10市場（札幌、函館、室蘭、釧路、帯広、旭川、岩見沢、小樽、苫小牧、北見）の合計
 注2 ()は道内産の割合(%)

表7 道内産キノコ価格の推移（札幌中央卸売市場）

単位：円/kg

品目	年	H 4	5	6	7	8
生シイタケ		1,044	1,060	1,017	938	983
ナメコ		659	603	571	550	589
エノキタケ		436	500	497	422	374
ヒラタケ		547	608	577	504	556
タモギタケ		583	617	718	537	522
マイタケ		1,034	975	1,049	810	874
ブナシメジ		744	781	585	704	683

注：価格は年間総平均価格（総売上/総取扱量）

は、大量安定供給を求めていることから、生産者が組織的な供給体制を整えていく必要があります。7年現在のキノコ生産組織は、90組合で会員数654人となっております。その内訳は、シイタケ生産組合が58組合、

会員数456人，施設栽培型キノコ生産は32組合，会員数138人で，道内キノコ生産者の組織加入率は，シイタケ生産者が87%，施設栽培型キノコ生産者が85%であり，企業の生産者を除いては組織への加入率は高く，また，組織している会員の範囲は，市町村単位，集落単位，栽培キノコの種類ごとなど様々です。しかし，組織化が行われていても，個選共販，共選共販（一元集出荷）など組織的な販売体制を行っているとはいえません。また，個選共販を行っていても，地域によっては栽培規模が零細でロットがまとまらないため有利に販売を行うことができないなど経営内容に地域差があります。

おわりに

キノコ生産技術の大半は，本州企業が開発した生産方式をそのまま導入し，普及されていますが，キノコ

の原料である原木やオガコの樹種も本州と異なっております。また，気候も道南地方と道北地方では異なっています。したがって，林産試験場では，5年度に「きのこセンター」を設立し，優良品種，栽培方式の開発，生産技術の普及などの努力を行っています。その成果のひとつとして，7年度に，タモギタケの新品種「エルム・マッシュ」を開発して特許申請を行い，8年度より種菌の頒布を行っています。また，キノコの生産にあたっては，以上に述べてきたような現状を踏まえ，生産者の経営分析を行い，生産規模，栽培形態などに合わせた改善を図り，生産体制を確立していくことが必要と考えます。

参考資料

北海道水産林務部：平成8年 北海道特用林産統計
（林産試験場 主任林業専門技術員）